

教員採用（栄養教諭）選考試験の指導に携わって

女子栄養大学非常勤講師 宇佐美 美巳子

はじめに

今年度から、神奈川県では新たに栄養教諭の募集が始まったが、埼玉県では2年前から募集人員が約半分の5名に削減され、さいたま市では今年度は3名、すなわちマイナス7名となった。また、依然として東京都では、単独の栄養教諭の募集はない。関東圏近くの他県でも採用のない県もあるし、採用があっても若干名という枠が多い。

食育は大事な教育指導であり、給食の果たす役割は大きい。確かにDXの推進やPISA等の結果から教育に要求される課題や期待は山積しているが、これが栄養教諭採用をめぐる現実でもある。他の教員募集の倍率が低い中、栄養教諭は15.6倍の状況であり、夢や意欲をもって採用に臨む学生たちを目の前にして複雑な思いを抱いている。

以下、指導の具体的事項について記載する。

1 栄養教諭を目指す意義や価値についての確認事項

専門は栄養担当であるが、児童生徒にとっては、まずは先生である。『教育は人なり』という言葉があるが、どんなに優れた栄養に係るスキルや実践があっても、子どもが安心してのびのびと学校生活を送るための環境を作れることが前提条件であり、極めて、この言葉が示す姿勢は大切である。すなわち、結果として失敗しても挑戦する環境を作り、善悪はあっても、いったんは受容できる包容力が教諭には求められる。そして、保護者とも同じ方向を向いて学び続ける意思と誇りを持つことが重要になる。

教育公務員の価値の一つに、子どもから学ぶ、ともに育つことがあげられるが、このような貴重な体験が待っていることに、夢をはせてほしいと願っている。

2 一般教養は自分の思考力の下支えとなる

子どもの学力向上のためには、いわゆる「生活言語」と「学習言語」の違いを理解してコミュニケーションをとる必要がある。教科は9教科あるが、各教科独特の学習言語に基づき適切な言語環境に寄与したい。そのためにも、教育時事も含めて、自分の学力不足は補っておく必要がある。よって、計画的に、8割突破を目指すようにしている。それは、自分の指導力向上のための第一歩の取組と言っても過言ではない。自分の現時点での力に合わせて、時間をかけながら、取り組む。これらの学習は、教諭となった未来の自分を助けることにも繋がる。昨今の採用試験には、一般教養試験のない自治体もあるが、思考力、とりわけ今必要されているクリティカルシンキングなどの下支えになるものなので、大切にしてほしい。また、語彙力は質量ともに鍛えておくことが肝要である。なぜなら、教諭は、子どもたちにとって一番身近な言語環境の担い手でありモデリングとなるからである。採用試験は教諭になるための初めの試験であるが、教諭としての基礎作りにもなっていると考え。これらを理解して、地道に学習を積み上げてほしい。

ちなみに国語、数学、英語は高校1年生レベル、理科、社会は中学校卒業レベルの出題が多いと思われるが、自治体によっても、出題傾向の相違は見られるので、過去問題集

を早めに解いて、計画を立てる必要があった。意識を高く持ちながらの検討を、期待したい分野である。

3 教職教養の内容理解は、教育公務員としての自覚を育て、その姿勢を作っていく

特に教育原理については、学習指導要領をはじめ、国の施策の根本をなす通達などがたくさん含まれている。問題を解きながら、なぜ、この問題が出題されているのか、この問題の通達や法が現状の課題とどうつながっているのかなどを、考えて解いていくと、歴史的意義や理解が深まっていくと思われる。もちろん、時間がなければ、暗記優先になってもよいと思うが、課題意識を常に持ちながら学習していくと、いわゆるディープラーニングとなり、知識の定着はもとより、教育公務員としての基礎作りにつながると思う。

また、一番新しい情報に基づく学習をすることが大切であり、法や条例の改正、改訂や新たに示された通達などに注目して学習をしないと、求められている正答にたどり着かないだろう。もちろん、地方公務員法や教育公務員特例法の内容には不易の部分もある。しかし、前述の通達や改訂、改正には、いわゆるアップデートが求められる分野であり、今の、現状に合わせて変化していく流行の部分でもあるので、情報には敏感であってほしいと思う。(例えば「こども基本法」、「こども家庭庁」、「こども大綱」など)

4 論文は「書く」作業を通して「伝える」力を育てる

論文については、まずは、論題について正対しているかが問われる。すなわち、序論の部分で判断される。論題は、現状の教育課題と考えられているものが出題される傾向が強い。その社会的背景なども記載することが多いが、一番肝心なことは、「あなたは。どう考えますか」という問いについて回答を記載することである。本論は、文字数にもよるが、柱は2つ程度が妥当である。1つの柱については、論、例、策の流れが一般的である。文字数の関係で、例はなくてもよいが、論と策は必要である。(特に、策は最低2つ以上ほしいところ) その際、柱として掲げた目標(ゴール)との整合性を取ることを意識して記載していく。最後の結論の部分では、決意や覚悟などを記載するが、本論で記載できなかった視点を付け加えてもよい。まずは、書くことが必要で、同じ論題で、何度も書いていき、推敲しながら論文の書き方に慣れてほしい。少なくとも、本番では自分なりに納得のいく論文を書いてきてほしいと願っている。

5 面接について

面接には個人面接と集団面接がある。

個人面接では志望理由やその自治体をなぜ選択するのかについては明確な応対が求められる。伝え方についての訓練が必要で、簡潔に、結論から述べて理由を付け加える。面接官の姿勢や態度に振り回される必要はないが、質問には必ず意図があり、一旦その意図を考えてから、正体した応対ができると素晴らしいと考えている。想定質問などを考えて、自分なりの答え方を準備しておくことも大切ではあるが、その答え方に固執して、目の前の面接官とのコミュニケーションに「心ここにあらず」とならないように、気を付けたい。

なぜならば、うまく答えていくことよりも、今、その場でのコミュニケーションに集中して取り組むことの方が、何百倍も大事だからである。そのことを意識して取り組んでほしい。

集団面接は、同じ質問について、各自が答えていくスタイルである。一つの質問に、5～6通りの回答が期待されているので、準備が必要である。参考となる情報について、受験する自治体をはじめ、全国の給食だよりや献立表、食育だよりなどに目を通して、自分の指導力となる材料を集めておくとういだろう。「自分ならどんな取り組みをするか」、「自分ならどんな危機回避をするだろう」など、自分事として広い視野をもって準備しておきたい。面接における一般的な事項、視線（目線）の位置、手の位置、足の位置、自分の癖なども自覚して、万全を尽くして臨んでほしい。

5 模擬授業、場面指導について

指導案を作成する試験、実際に授業の導入部分を実施する試験、ある場面を設定されて子どもとかかわる指導を実施する試験など、自治体によって異なるが、過去問題を参考に練習する必要がある。いずれにしても、授業の場合はその授業の目標があり、達成するための導入であり展開であり結末であることを押さえてほしい。付け加えるならば、今日の授業改善で盛んに実施されているのはアクティブラーニングであるから、子どもが「主体的に、対話的に、深い学び」となる授業を意図的に実施したい。場面指導においても、指示、伝達よりも「聞く」と「否定しない関わり方」が期待されている。子どもの言動には必ず理由があることを念頭に入れて、落ち着いて納得のいく実施を期待したい。

6 集団討論について

討論とは、ある問題について互いに意見を出し合って論じ合うことである。討議ではないから最終的に何らかの結論を導くことは必然ではないとも言える。もちろん、討論の結果、ある方向性が出て結論が導かれるかもしれないが、重要なことは、結論ではなくて、互いに意見を出し合って論ずること・・・すなわち、自分の意見を出すことである。

また、討論のメリットは、意見交換をして、問題の本質が理解できること、新たな視点や解決策が発見できることなどもあげられる。そのようなことを意識しておけば、

①まずは、問題についての自分の意見を発表すること。他者の意見についてのつけたしでもよいし、共感できる点に絞っての意見発表でもよい。

②意見発表の内容には、その問題の本質について確認する内容でもよい。

③もちろん、意見発表ばかりではなく、その面接グループのチームとしてのまとまりや親密性の高まりも、その意見発表の展開によって醸し出される。

④一つのチームとしてみたら、メンバー一人一人が積極的に参加して、より建設的な意見で盛り上がっていているかも大切。

・・・のような展開が期待できると考えている。

7 期待したいこと

自分の生き方は、いかようにもなるが、行動しなければ何も変わらないものでもある。「やってみたいことをやる」「なりたい自分になる」「好きなことに集中して生きる」な

ど、どれも魅力的だが、自分はいったい何が好きで、どのような自分になりたいのか、何をやってみたいのかが明確でないと、前に進めず、不完全燃焼で、今一つ自分に自信が持てないと思われる。

女子栄養大学の学生さんたちは、真面目で明るい。魅力的である。ただし、自分から、世界の情報を集めて、「こんな食育指導で、子どもたちの食への意識を変えていく」とか「給食献立の新しいアイディアはいつも10個以上持っている」などの熱量や職への矜持の部分では、やや物足りないかもしれない。各人が各様ではあっても、学び続けていくひたむきさと同様に、「栄養教諭」という「職」への矜持が、今こそ試されているのではないだろうか。

少子化の影響から、義務教育学校では、小学校と中学校の統廃合が進められている。そのような状況だからこそ、一つの学校には、必ず栄養教諭が必要であると、教職員や保護者、社会からの要求が「声」となって聞こえてこなければならない。

子どもたちの生涯の健全な生活の保障のためにも、食育指導は必然である。だから、今こそ、髪を振り乱してでも、必死に取り組む時期の到来だと考えている。

そのような意味からも、まずは、栄養教諭の採用試験を突破して、「チーム栄養教諭」として土台を作り、近い将来に、「一校一人の栄養教諭配置」を目指してほしい。

個人的には8年間お世話になり、有意義な時間を過ごすことができた。たくさんの素晴らしい人たちとの出会いに感謝して、これからも、学び続けていきたいと思っている。